

持続的な「小さな社会経済」の未来を構想するための アーカイブの模索：ポスト経済成長期青森県の生業口述史の蓄積

白石 壮一郎¹
近藤 史¹
葉山 茂¹

1. 目的と背景

本共同研究プロジェクトは、青森県内の漁業・林業従事者を対象とし、生業にかかわる基礎的な聞き取り・観察調査を実施し、将来的なアーカイブ（記録の集積と保存）の素材となる基礎データの扱いを議論することを目的とした。

漁業・林業は全国的に久しく構造的後継人材不足の状況にあり、青森県もその例外ではないが、産業としても生業文化としても重要な位置を占める。たとえば「北東北三県」の岩手・秋田・青森で経営体（漁家や事業体）の数でみると、2011年の東日本大震災以後は、青森県が他の二県を上回っている。また、青森ヒバ（ヒノキ科アスナロ属）の針葉樹林は、秋田のスギ林、木曽のヒノキ林とならび日本三大天然美林と称され、青森県面積の66%は森林面積である（2017年時点）。

しかし、漁業・林業に関しての人文・社会科学的な研究調査は農業のそれに比べても近年マイナーな位置にとどまっている。したがって、県内の漁業・林業について基礎的な調査研究を重ね、基礎的なデータを集積していくこと自体に意義がある。本プロジェクトで収集されたデータは、聞き取りと観察による漁業・林業に関する基礎調査のトピック検討の材料となり、調査で得たデータを将来的に一般に公表する形式、公共性のあるアーカイブの方法を検討する材料となるだろう。

本プロジェクトの各調査は、具体的な諸個人を対象に据え、かれらの人生上の経験を聞き取り、現在の生業にかんする活動・行為の観察をデータとして蓄積する。ここで言う「具体的な諸個人」は、年代で言えばおおよそ50歳から80歳の年齢幅である。かれらは高度経済成長期の終わったあとに働き始めたり、仕事で一人前になったころに経済成長期は終わっていたりした世代である。かれらのなかには転職、Uターン、兼業経験者が多い。かれらの経験や、身につけている技術と知見は、かつての日本民俗学や生態人類学が好んで記述の対象とした「伝統的生業」のその枠内には収まりきれないものであり、その点にも着目したい。

2. 実施状況

本プロジェクトの3名のメンバーは、それぞれ沿岸漁承継（下北郡風間浦村；白石）、出稼ぎ漁（上北郡野辺地町；葉山）、山林管理と利用（下北郡むつ市脇野沢、風間浦村、むつ市大畑；近藤）についての調査をおこなった。いずれの調査も現地に赴き、対象となってくださった方がたへの聞き取りや、同行し

¹ 弘前大学人文社会科学部

た活動の観察をもとに手書きノート・写真・音声などの記録をとっておこなわれた。

2-1. 沿岸漁業承継経験についての聞き取り調査（白石）

2020年7月、および9月に青森県下北郡風間浦村にて、合計5日間の聞き取り調査、観察調査をおこなった。いずれも調査の相手をしてくださったのは専業漁師のAさんご夫妻である。Aさんは現在60歳代半ばであり、風間浦村で生まれ、中学校を卒業後に東北圏内でのいくつかの職を経て首都圏に出た。30歳のときに結婚し、まもなくUターンして風間浦村で専業漁師となり、現在に至っている。

この調査では、Uターン後にAさんが沿岸漁業に従事するなかで、漁法や漁場について学んでいったプロセスを聞き取ることに照準した。風間浦村の漁家は沿岸漁業を営んでおり、イソブネと呼ばれる船外機付き小型和船でのウニ・アワビのモリ漁、ウニのカゴ漁、およびカマやネジリによる天然コンブ漁を主幹とし、これを40歳代から80歳代のすべての年齢層の漁師がおこなっている。一方、40歳代から60歳代を中心にチャッカ船と呼ばれる焼玉エンジンの動力船によるアンコウ刺し網漁、イカ漁などがおこなわれている。このうち、この調査で聞き取っているのはイソブネでの漁である。チャッカ船での漁は通常2-3人が乗りこんで出漁するのに対し、イソブネはひとりで出漁する場合がほとんどだ。

Aさんの父親は村の「一番漁師」のひとりだった。Aさんが30歳でUターンしてきたとき、父親は70歳で現役漁師だった。Aさんは子供の頃から父親の手伝いで日常的に漁に出ていたので、2人いる兄に比べても自分が漁が得意だと思える程度にはなっていた。子供のAさんは、隣で父親の仕事ぶりをみているだけでなく、時折指示されて真似ごとでもやってみた。中学生のころには、水面から海中を覗くハコメガネ、コンブを刈るネジリやカマ、ウニ・アワビを突くモリなど一連のイソブネ漁の漁具もあるていど使えるようになっており、独自にワカメ漁をした。

Aさんは三男で、家業の漁家を継いだ。ただし家業を「継ぐ」というリアリティはAさんのなかにそれほど強くない。実際、Aさんは父親から船などを受け継いだわけでもない。それよりも、だれかが家において親のメンドウみる、墓を守るなどしなければいけないという、「家に居る」という思いのほうが強いの。Aさんが漁の面白さを学んだのは子供の頃の父親の手伝いからだが、Uターン後は独立して父親とは「別の船で」やってきて、周りの漁師仲間のなかでさまざまなことを学んで現在に至っている。

聞き取り調査では、中学生のころのワカメ漁のこと、そのころの父親との関係性、Uターン後の周囲の漁師との関係、漁師仲間の教え合いと競い合いの気風について主に話を聞いた。

2-2. 出稼ぎ漁経験についての聞き取り調査（葉山）

2020年7月、および9月に青森県上北郡野辺地町にて、合計2日間の聞き取り調査をおこなった。調査の相手をしてくださったのはBさん（7月）、Cさん（9月）であり、いずれも野辺地町歴史民俗資料館のスタッフの方からご紹介いただいた。

Bさんへの聞き取りの内容は、ライフヒストリーおよびホタテ養殖、ホタテ漁についてである。Bさんは高校を出てすぐにホタテ養殖の仕事に参加し、別の仕事をすることはなかったという。野辺地町のホタテ養殖では、稚貝を採取して出荷するまで育てるホタテ養殖と稚貝をある程度まで育てて海に撒いて解禁時期に地域の漁業者たちが獲るホタテ漁とがある。ホタテ養殖では、稚貝の採取から出荷までに複雑な選別と育成の過程がある。

Cさんへの聞き取りの内容は、ニシン漁などの出稼ぎ経験についてである。Cさんは17歳のときに選考人と呼ばれる先達(サキダチ)に誘われて北海道の利尻島仙法志の親方のところにニシン漁出稼ぎに行った。それが青森からのニシン漁出稼ぎの最後の年で、その後、野辺地に事務所を構えていたマルハの先達に誘われて南氷洋・北洋で漁をする大型船に乗り1981年まで船員として漁に出ている。野辺地町歴史民俗資料館のリニューアルにも関連して、ニシン漁の出稼ぎ経験など歴史的な経験で、モノが残っていない事項については、経験者への聞き取りデータの蓄積がいま喫緊の課題である。

2-3. 山林の管理、薪炭利用についての観察および聞き取り調査（近藤）

2020年8月、および10月に青森県下北郡むつ市脇野沢（旧脇野沢村）、下北郡風間浦村、下北郡むつ市大畑にて、合計5日間の聞き取り調査、観察調査をおこなった。

8月の脇野沢調査では、X集落に住むDさんの案内で、国有林の中のX集落住民むけ「ヤマワケ（薪炭用の山林配分）」現場を観察するとともに、同氏へ燃料木利用に関する聞き取り調査を実施した。例年、夏に東北森林管理局脇野沢森林事務所から集落へ、その年にヤマワケしてよい森林区画が通知されると、希望する世帯が集まって利用割りを決めて、世帯ごとに樹木の伐採と搬出をおこなう。かつては夏・秋に伐採して、冬に木製ソリやプラスチック製ソリに丸太を積み、谷筋の雪を滑り降りて搬出していた。現在は丸太の運搬に運搬車と軽トラックを利用するようになったことから、秋のうちに搬出まで終える。

Dさんにはまた、同氏が所有する漁船に同乗させていただき、地域の漁場を観察するとともに、ご自宅でライフヒストリーに関する聞き取り調査を実施した。Dさんは16歳のときから青森市やむつ市の工務店で働き、30歳で脇野沢に戻って大工として独り立ちした。その後は、大工を主業としつつ、漁業テツダイや山林利用、道路除雪など複数の生業を複合的に営んできた。13年前に自宅に薪ストーブを設置したことで、燃料調達のためヤマワケに参加するようになった。当初はプラスチック製のソリで木材を搬出していたが、8年ほど前から主業の工務店で所有していたバックホーで作業林道をひらき、運搬車で搬出するようになった。高齢化によって伐採・搬出労働が困難になり、ヤマワケをやめたり規模を縮小する集落が多いなかで、X集落ではDさんが重機で作業林道をつくり、舗装道路までの木材搬出をサポートすることによって11世帯（集落の約3分の1）が薪炭利用を継続している。

脇野沢ではこのほか、森林管理局非常勤職員（定年退職後の再雇用）のEさんのご自宅（Y集落）において、脇野沢の国有林における林業施業と地元のヤマゴ（山子、木こり集団）の歴史について聞き取り調査を実施した。



写真1 脇野沢X集落。薪炭用の「ヤマワケ」の境界を説明するDさん。



写真2 むつ市大畑。Fさんは独力でヒバ樹の挿し木苗づくりを継続してきた。経験的に導きだされた、よい苗（早くまっすぐ生育する株）になる枝の選定基準を説明するFさん。

10月の風間浦村・むつ市大畑調査では、風間浦村在住の漁師 A さんから林業に従事する F さんをご紹介いただき、お二人に風間浦村における林業やヒバ植林の歴史と現状に関する聞き取りをおこなった。この聞き取りの翌日、F さんの仕事に同行させていただき、下北地方森林組合が下草刈り作業を請け負うヒバ植林地（むつ市大畑）を見学し、ヒバの植林・育林に関する作業内容や使用道具について観察と聞き取りを実施した。

また、A さん所有・管理のヒバ・スギ混交植林地を見学し、A さんの父親の代から親子 2 世代にわたる農地から林地への転換といった土地利用・資源管理の歴史と、現在の育林作業や間伐材の利用（養殖昆布のはざがけ乾燥等）について観察と聞き取りを実施した。

3. 考察と課題

2020 年度は COVID-19 パンデミックをめぐる国内状況が流動する中で実施されたため、本プロジェクト現地調査は移動についての規制（大学からのもの、自主的なもの）のあいだを縫っておこなわれた。フィールドワークとしては取りかかりにすぎない。したがってここでは、どれだけ詳細なデータを分厚く集め得たかということは最重要事項とはしていない。以下では、漁業・林業など生業についての観察・聞き取り調査、およびデータ公開（印刷物、資料館展示）の意義などを考察し、今後の展望について議論したことを示す。

調査トピックは、メンバー各自の特定の関心にもとづいて設定したというよりは、調査地の方がたの現在の活動や関心、調査地の歴史民俗資料館からの要請など、対象社会からのニーズのある、生業に関わる知見・経験について話を聞いていったという性格のものである。なかで調査者のもつ関心と接点をもつ対話の広がりや調査トピックとなっているのであり、こうした地域の方がたとの知的協働はこんにち地域社会調査で欠かせない点である。

かならずしも「地域活性化」などの施策と直結しないこうした事例記述的なデータに関して、地域民俗資料館が関心をもっていることは心強い。ではこうした基礎的なデータコンテンツの受け手として、どのような人が想定できるだろうか。まず、調査地域の方がたである。地域の生業の記録が残ること、しかもそれらが生業の担い手である名前をもった個々人の語りや写真とともに残ることは、記憶を形にして残し、次世代に伝えていく希望を地域の人びとにもたす。次に、教育の現場である。とくに大学など高等教育の現場では、地域社会の生きた歴史を知るだけでなく、こうした調査法や調査を蓄積する意義を伝えていくことができるだろう。

ほかにも、地域への移住についての基礎情報を提供する可能性が考えられる。たとえば漁業の承継経験については、I ターンで転入を希望する人などにとって参考になるかもしれない。もちろん、ある事象（生業知見の継承）についてのある時代における経験が、現在でもそのまま妥当するというわけではないし、事例に登場する漁家を承継した A さんの U ターン事例は、他地域で漁業との接点がほとんどなく I ターンする人とは条件が違いすぎるなど、聞き書きの内容そのものの一般性はかなり限定されている。だが、そこにはかれらにとって学術論文・学術書や政府・自治体の web サイトからは得られない有用な質的な情報が随所にみられることも確かだろう。

将来的にデータを公開する場合の形式や、公開の媒体、公開の範囲は熟考を要する問題である。よく指摘されるように、人びとの実際の語りは、受け手からすればいっけん論理・話題の一貫性を欠くような箇所や、時系列の前後が混乱しているかのような箇所がしばしばある。また、みようによっては冗長な繰り返しなども多い（学術的には、これらは興味深い点にもなるのだが）。より広く読者をもとめるためには、もともとの語りの個性や面白みを失わないよううまく整理・編集して、要約など示したリード文をつける、細部を豊かにする註釈やコメントを効果的につける、写真にも丁寧なキャプションをつける、などの工夫が必要となる。

公開の媒体は資料館、そしてインターネットを想定できる。インターネットで公開する場合、その公開の範囲をどの程度制限するかは資料の内容・性質によって異なるが、こうしたことをすべて調査地の語り手の方がたと議論して決めていく必要がある。かつ、こうした検討や協働のプロセス自体を記録に残していくことも重要だ。また、映像による記録は撮影時に公開を前提とした了解を得やすいことや、Youtubeなどのプラットフォームを利用しやすいことなどのメリットがある点を踏まえて、今後検討の余地がある。

なお、本プロジェクト各調査の内容と議論の詳細は、今年度末（2021年3月）に報告書として印刷・製本して公表する予定である。